

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

田村紀雄 安藤明之 上田裕 山崎隆広 川又実

はじめに

この研究グループは、1973年から、2009年まで、ほぼ10年おきに岐阜県下の郡上村（調査のためのコード名）の全戸を対象に、5回にわたり調査票を用いたコミュニケーション調査を実施してきた。今回、すなわち2010年には、やや趣をかえて、全戸の悉皆調査ではなく、5人の典型的な村民（世帯）を対象にした「個人史」の聞き取り調査を実施した¹⁾。「典型的」というのは、村の行政上の役職にあり、村民のリーダーとして村民から敬意をもってみられるS、H父子、女性として村の世話役を担っているMさんたちである。

個人史（ヒューマン・ヒストリー）ではあるが、同時にむらの歴史でもある。このむらというのは、江戸時代の庄屋、明治維新の戸長役場、町村制が敷かれて以降の町村長、2010年にこの地域の7ヵ町村を合併しての「郡上市」になって以降の行政指導者（市議員、市長）といった経緯をたどる。その政治的变化と、戦争、戦後の農地改革、高度成長期の減反政策、山林経済の崩壊などきわめてドラスチックな経済の変革、そして教育、娯楽、情報生活での革命である。

なお、このレポートは、6回のインタビュー調査²⁾のそれぞれを纏めたもので記録そのものではない。6回分の生の記録は、CD版、文字におこしたスクリプションの双方のかたちで本プロジェクトが保存しており、研究のための供覧が可能である。なお、この研究調査には、財団法人・電気通信調査会の2010年度の助成をうけている。

I. F家Sさん、Hさんの家庭

①「むら」の様子

「むら」という用語は定義しておかねばならない。行政上の「村」も明治維新以降の「村」も戸長村、町村制施行以降の「村」、戦後の地方自治法以降の「村」、郡上村もまきこんだ2010年4月以降の「平成の大合併」によってできた「村」と、江戸時代以降も連綿と続く「自然むら」と区別しなければならない。このわれわれの調査でいう「村」とは、ほぼ後者にちかい。行政上はいくつかの「大字」をふくむ。また、第三の使い方として「うちのムラ」というように、近隣（ネイバーフッド）を漠然と指す場合がある。



「炭焼き」の調査風景（2010年8月撮影）

郡上村のなかほどの集落に住む農家で、230年前の明和年間に、同じ郡上郡のひと山こえた集落から移り住んだと記録にある。この郡上村でもっとも古い居住者は「K」家である。Sさんは、この村へきて9代目、現当主のHさんが、10代目、その長男が11代目になる。

F家は、郡上村へ移動する前のむらでも「在所で庄屋」だったという。しかし「5代目が、S神社へいって神官の資格をとるなど、全国行脚18年で、途切れ、大正3年に再健する。F姓は、飛驒のF、そこからの移住、その本家から6代目がいまの土地に分家してわかれた。両者は同じ郡上村だが、1キロほどはなれて生活を建てた。

なお、本家は、岐阜県内でも有数な大山林地主として知られているが、ここ10数年の木材不況でかなりの打撃をおもった模様である。田村が40年前に郡上村の調査に入ったとき、本家の権勢は飛ぶ鳥をおとすほどであった。数千町歩の山林を所有し、郡上村100戸のほとんどが、これらの山林に依存して生活していた。電話回線が個人としてひかれているのは、この本家だけで、それ以外にも、村で最初の複写機を備え、製材、木場、販路を維持するため相当数のトラックなどの自動車を所有、村の男性多数を雇用、伐採、運搬、製材の仕事に就いた。女性はヤマの下刈り（雑草刈り）、小枝取り、苗の植え付け、雑役の仕事に雇用了。

しかし、輸入材が増えて、木材産業は打撃をうけ、むらびとがヤマにはいらなくなったのと歩をあわせて、里山にまで猪、猿の大軍が押し寄せ、庭続きの畑まで荒らすようになった。

奥山の動物の世界が、里山の人間活動のよって維持されていた境界線が村にさがってきたのだ。林業の不振と逆に、自動車産業などの工業製品の生産が拡大して、若いむらびとは、下流の関、美濃、名古屋方面に工場労働者の職をみつけ、また郡上郡のなかにもその下請け工場が多数生まれて、残余の男子や女性もそこに転職する時代をむかえる。

Sさん宅は、郡上村という山村で独自の家計設計をしてきた。庄屋の家系でもあるF家は代代、むらのリーダーである。そのような自覚もつよい。むらびとには、「昔は、どこでも山だけで食えたんや」、「そう教育せんでもいいと、とにかくまじめで働くことさえしておれば、ここで食っていけると、主に炭焼きが大事だった³⁾」。

大正時代から、昭和3年ころまで、炭焼きの仕事はあった。「昭和6年ごろ初めて汽車が来たんかな」。木炭を鉄道でだすようになった。

まだ、敗戦後は木材用の樹木は育っていなかったので、「樺や桐、ひとりはえの杉やヒノキ」といった雑木で炭を焼き、馬車や木馬で出荷したため、量もしれていた。木炭は、郡上村の谷間をくだり「こうのはら」という長良川に合流する河岸までおろし、そこから美濃市まで筏に組んで運搬した。

そのご、都市での材木需要が高まり、切り払われた雑木のあとに、建築材向きの杉や檜が昭和25、6年ころから、30年代にかけてどんどん若木や苗木が植えられた。若木は5、60年育てれば伐採できるということだった。「明治時代に植えておらんと、昭和初期に植えたものでは、切れるまでになっているものはないがな」。

戦後植えて、山にてをいれて大変な4、50年を経て、「50年ほどたって初めて成木になって金がとれる。が、それまでに皆いかれてしまう」。結局、植林が商品化する前に、バブルがはじけて大方の農家は失敗する。戦前からのヤマもちの一部の大地主を除いて。

② Sさんの仕事。

Sさんが伐採のしごとをしていた時代の作業は大木の皮むきを中心だった。木材の周囲を1メートルごとに樹皮に切り傷をいれて皮を剥く。1間あたり5円か6円、なんと1日に100間もむいた。500円か600円になった。「100間剥くのは、容易なことじゃなかったけれども」。「それも、昭和34、5年ころまでよな」。

運搬機器が生まれて材木が生のままどんどん運べるようになった。「それまでは必ず木馬か馬車で積まんなん。どんな大きな木でも人足で積んでもらったんです。今のようにつまんでのせる（クレーンの）ようなことはできへんでな、どんな木でも押してのせるんです」。「やつをみんなで押しまくったり、こせたりして、てこで積んだんや。わしらも随分トラックに積んだな」

しかし、昭和40年代にはいり、米余りということで、減反政策になり、「田圃や畑にどんどん植林してしまったんや。植林して、木さえ植えておけば親方になれるということで、国

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

も挙げて奨励があったもんで。今は、どっこい、貰い手もないで。今、山なんかどこでも、これはおれのもんや、といったって、だれも怒らへん。そういう時代になってしまった」。

林業に雇用されていた男たちは、「ここにD工業とか、関市のほうにも工場ができて、全部そっちへ行ってしまった。もう山はダメだと」。

林業が栄えた時期、女性にも仕事は多かった。植林のあと、雑草、樹木にまきつく蔓の除去、雪で倒れた若木を一本一本おこして紐で結わくなど、女性の厳しい仕事だった。「親方に一日に、米三升もらえと一人前だった」。林業では、「植えてから3、40年たたねば、金にならんから、財源がないとあかん」。

Sさんの妻は、隣りむらの大原から嫁入りした。父は馬車引きで運送業をしていたが、家庭は農家であった。Sさんに嫁いではからは、むらの他の家同様、やまの仕事に携わった。馬車は基本的な輸送手段だったから、Hさんの家の前も、木材を積んだ馬車が往来し、馬糞は回収して畑に播いた。

Sさんは、1928（昭和3）年生まれ、戦時中は16歳で特攻隊に志願、多摩川べりにあった東京航空総本部に勤務、復員後、人の世話で結婚したが、それは実父が死去したこともある。「結婚してできる資格は何もなかった時分で、やっと子供をくわせるほど、父が死んで、残った兄弟をどう食わせるか。一番下が2歳だった。」農業やヤマ仕事で懸命に働いた。

「それでも、僕らは恵まれていた。北のK村なんか、こちらと想像のつかん苦しみがあるでな。わしらが、覚えておるときでも、随分山を焼いて、村総出でヒエとかソバをつくっておったでな。ここらでは、それまでのことはせなんだわな」。戦前は、この周辺の村むらから、多数の満洲開拓団がでたのも、厳しい山村だったからである。ソ連の侵攻で、多数の犠牲者がでたあと、県下に引揚者として帰国したが、生活に必要な田はたがないため、こんどはブラジル移民として再び海外へ渡った農家も数知れなかった。

③ Hさん

Sさんの長男のHさんが当主である。戦後の1952（昭和27）年の出生。「結婚早かったですよ。おやじは19、ぼくは22でしたから。おやじが結婚は早くせんないかんと、やかましくいったんで」。Sさん、いま曾孫が12人。Hさんの長男が34歳、こどももいるから、4代が一緒に生活している。「四世同堂」は、現在では珍しいが、F家もそれなりの努力がある。大所帯のため、自宅は3棟にわかれているが、食事は全部一緒とのこと。

Sさんの哲学は「いくら社長になろうが、どんな肩書になっても、うちにこなんたら何もならんで。」近所でも、「若いもんが、都会で成功しておるもんで、もう帰ってこんやろな。年寄りには寂しい思いをして死んでいかんなんのや」。

「この家で何代も住んで、木を自分で切ってつかったもんで。絶対に丈夫いという家につくったんや。」この間、藁ぶきから、かわらにし、建て坪も92坪、部屋数は2階が6部屋と

倉庫，勝手やフロは，別に出したから屋根の面積は大きい。1階では，1962（昭和37）年から，40年まで酪農のため，牛40頭が飼えるスペースもあり，現在は農機具倉庫や作業場になっている。「材木は売れん，もう炭が売れん，百姓をやるなら酪農のほかかないということで。それも，歳をとってから，えらいがな。365日，1日も休みがないので」。75歳で乳牛経営を廃業している。郡上郡全体では，肉牛農家が多いが，投資も大きく，Sさんは，乳牛飼育のほうをえらんだ。国の転作行政で，耕作を手放すひとがおり，Sさんは5町歩ほど引受，おかげで，飼料の生産ができた。とにかく，餌は買わんとときめた。餌代がおおきく，普通コストの4割くらいかかるのを，3割以下に抑えた。

酪農に全力を注いだため，30町歩ほどのヤマは放置され，植林もしないため広葉樹だけに荒れてしまっている。その巨木になった広葉樹で，現在，Sさんは，郡上村で唯一の炭焼きになっている。炭にむく硬い楯，楯を自分で伐採して運んでくる。若いもんにはできない。

Hさんは，そのころ，「郡上村」をふくむ上位の行政村で役場の助役だった。公害問題がやかましくなり，牛の糞尿問題，においの処理，立場上「やらんほうがいい，とさっと辞めた。置く（経営中止の意味）置けん人があるけど，わしは借金せんかったので，さっと置いて」しまったとか。借金がなかったのが幸이었다。

酪農はやめたが，Hさんは，指導員の資格をとり，自宅は，県の農業大学校の指定研修所になり，後進の指導にあたることになった。それが，縁で村会議員を3期続けた。のちに，村の助役に任じられたのである。したがって，農業経営や，農業技術だけでなく，県政，村の行政や財政にも明るい。郡上郡の7ヶ町村が，2010年の「平成の大合併」では，旧郡上八幡町を核に，新・郡上市が誕生，これを機に，Hさんは，助役を降りた。一般職員なら，合併後も定年の60歳まで在職できたが，助役は特別職のためポストを失った。

郡上村は，平安時代に郡上郷として歴史にあらわれ，荘園制下で，吉田庄，江戸時代は稲葉，金森，青山氏の領地になり，明治以降郡上郡と続いてきたが，郡上市の1地区になった。1879（明治12）年の近代的な自治制になったとき，11町88ヶ村が郡上郡を構成した。このときの「むら」は，小字に相当する「自然むら」だったようだ。領主や支配者がどのように交替しようとも，「むら」はむらとしてのこり，人々は生業をいとなみ子孫を遺し続けるという良い例である。

「平成の大合併」はちょっとしたドラマだったようだ。まず財政，合併と分かってから，7つの町村は，金を借りるだけ借りて，それぞれ建設や事業をやってしまった。このため，合併したら合わせて1000億円の負債になった。郡上市民はその負債を返済する最中である。

つぎに市政。どこの合併でも同様だが，まずは，7ヶ町村の議員全員が新市会の議員になった。大変な人員であるため，選挙でいっきに減員する。でも，多数が元・市議にはなれた。この選挙は暫定で，2010年に，7ヶ町村を小選挙区とする方式が成立して現行の市議会が発足した。Hさんも，旧・郡上村から市会議員に選出されている。

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

F家は、市議の歳費では不十分であり、Hさんの長男、その妻、Hさんの妻、全員が働いている。すなわち、Sさんが、炭焼き、Hさんが公務、長男が会社員、そしてHの妻と長男の嫁のふたりが「アントレプレナ」、漬物工場を自宅に起こした。「さなちゃん工房」である。これはHさんの妻の名前で、「むらブランド」にしている。漬物名人として梶原知事時代にコンクールで入賞、表彰をうけた。これを活用しない手はない。

工房は、Hさんが村助役を解職となった平成16年に酪農を廃業した牛舎を改造、赤カブ、キャラブキなど10数種の野菜を自家栽培などで入手、漬物にする。真空パックの機械を導入して、製品にし、Hさんが、郡上市のなかにあるパーキングエリアや道の駅、市の特産物販売所などに卸す。その仕事はHさんの役目。新しい山村の農家のビジネスモデルになっている。

④郡上村の将来

この村も日本の一部であり、その政治、経済、社会の変化からのがれることできない。町村合併しかり。減反、材木の輸入と山林の放置、田畑への野生動物の侵入、東海・北陸間の高速道路の開通、その他の公共施設の課題、少子化や高齢化、電話、放送、その他の通信、新聞などの活字媒体の変化、零細商店の衰退と消費生活の問題、これらは、この郡上村にも表れている。しかし、むらびとは創意、工夫、自然や伝統の維持、家族の協力がひきつづき維持され、「限界集落」を格別に騒ぎ立てる状況になっていない。(田村紀雄)

II. Mさん

①プロフィール

Mさん(79歳)の家は、長良川にそそぐ河口から1キロメートルほど遡った川のそばにある。この集落は川の兩岸に拡がり2本の橋で結ばれている。橋は古く、昔は吊り橋だったそうで、その当時から川の兩岸は同じ集落であり、1930年代に現在の橋に掛け替えられた。山が迫っているのではほとんどの家は川を臨むように建っている。この川の上流にはさらに3キロメートルほどにわたっていくつかの集落がある。

Mさんの祖先は、現在よりもう少し川上にあったようである。Mさんは分家で3代目になり、本家と名字は変わっていない。現在の本家はもう少し川下にあるとのことである。どのくらい前にこの土地に来たのかについては、「それがわからん、年代がわからんのや」といい、100年とか200年とか前ではというと、「そんだけばかやないやろな」。やはり数百年前であろうか。本家の菩提寺に資料があるのではないかと考えたが、荊安にある菩提寺が火災のため過去帳が焼けてしまい昔のことはわからないようである。しかし、その寺には祖先の墓は残っているとのこと。

Mさんの家は築30年ほどになり、建築当時は茅葺きであったが現在は瓦に葺き替えてある。30年前では土地が貴重だったので、田んぼや畑をできるだけ広くとるために家を山にくっつけるように建てるのが一般的であった。そうして、Mさんの田んぼは4反あるそうである。昔は畑もあったそうであるが今では全部田んぼになっている。

② Mさんの生活と仕事

Mさんは4反の田んぼを持つ。収穫しても出荷をするわけではなく、全部自家消費になるという。野菜は全く作らず、買ったり近所からもらったりしている。最近では、田んぼに、ハクビシンやイノシシあるいは猿が来て被害を加えるようである。イノシシについては「イノシシのおりが入ってあるんや。おりをひっくり返すほどなんやで」、動物の生命力はかなり強いようである。田んぼの周りには電気柵が設けられているが、人がさわるとビリビリくる程度で、動物が死ぬほどではない。

Mさんは、以前森林組合に勤めていた。この付近の山一帯は広くFさんが所有し、管理している。Fさんと森林組合の関係については、「ないです。Fさんは、今はそんだけの助成金がないでなんやけど、20年代はどえらい国からの助成金が多かったもんで、個人でやっておられたんです」という。森林組合の仕事は、「伐採もやりました。けど、ほとんど調査が多かったです」。続いて「そうすると、Fさんが個人で山を維持していて、そのほかの人たちは森林組合に寄っていたわけですね」、それに対して「そうです。けど、今は助成金が少ないもんで」と現在でも森林組合は存続しているが、少し事情が異なるようである。これについてMさんは、「今はもう30年、40年ぐらいの木材なんか本当に安いもんで、採算が合わんです。Fさんは80年以上たった木やもんで、6人ぐらい作業員がおるんかな。それでやっていけるんですが、50年以下やったらもう……」という。50年以下の木材は、丸太で道の駅の隣の集積場に集められ、用途によって振り分ける。そこからトラックで製材所などに出荷するようになっている。Mさんは、山をあまり持たないが、一応森林組合の組合員であり、サラリーマンのように勤めていたようである。

昔はこの付近のほとんどの人が林業にたずさわっていた。「昭和20年代なんか、全部炭焼きが多かったな。30年代になるとぼつぼつ若い人が勤めに出て、今ちょうど60歳以上ばっかやわ、勤めに出た人が」。勤めはここから自動車を通う人が多かった。

現在のMさんの仕事は、森の番という。森の番というのは、Mさんによると「1984（昭和59）年に県がつくってくれたんです。1996（平成8）年やったかしらん、それを受け継いで掃除に行っておるんです」。場所は自宅から2キロぐらいあがった先の神社の向かい側である。

③家族

Mさんの家族は、夫婦と遠くに自動車に通っている娘さんの3人である。多くの家の子供は、外に出て行ってしまいなかなか帰ってこないといい、「まず……。夏は結構涼しいけど、冬はもう、車のない家なんか本当に、この道路をこれから奥の人は出ていくに難儀しなれる。車の事故が多いんや、道路が凍ってまうもんで」と嘆く。「どうしても町の方が便利がいいで、ここらは本当に店がない。店というと荊安まで行かんならんで」と買い物に関わる苦勞を語る。

Mさんは、1932（昭和7）年にこの村に生まれてそのまま変わることなくこの土地で生活をしてきた。第2次世界大戦中もここにいた。この村の入り口にある集落センターが当時の国民学校で、中学校はもう少し離れたところにあったそうである。

Mさんのお父さんは和良（現在の郡上市）から養子に來たとのこと。この辺の家では、結構お嫁さんやお婿さんを遠くから迎え入れる人が多いそうである。Mさんの奥さんも和良から來たそうである。

この地区は川に沿って家が点在しているが、川にはウナギが生息をして、国の天然記念物に指定されている。そして、この地区の人々は、虚空藏菩薩の信仰が篤く、そのお使いであるウナギが妖鬼退治に來た藤原高光を道案内したという言い伝えがあるので、ウナギを食べない土地として有名である。これについて、Mさんは、「このごろは町の人が多いもんで、ここの集落ではウナギが食べれんのか。それが、よそから見るとウナギの味というのがわかっておるもんで、食べたいんやろうな。それで、出ていって食べるということと言われるんです」といい、ご本人はこれまでウナギを食べたことがないが、奥さんはお嫁に來る前には食べたそうで、今は食べていないとのことである。

この周辺の村の人口はどんどん減少している。もちろんこの村の人口も著しく減少している。Mさんは、「本当におじいとおばあですよ。話していることもないし、けんかすることもないし」、「若い衆がおらんもんで活気がないな、やっぱり年寄りばっかやと」、「本当、おばあさんだけのうちがかなりあります。やっぱり男は寿命が短いというか、男の方が先に逝ってまうな」といっている。おばあさんだけの家というのは、周りで多少応援するのかについては、「何か買い物してあげたりするのは、昔のしきたりです」という。

この村では、ごく限られた名字が使用されていて、名字で親戚かどうかわかる。Mさんは、「この集落ではF家とO家とK家とA家か。多いのはやっぱりF家、O家、両方です」といい、さらに「昔は親戚だったんやろうけど、そんだけの親戚づき合いはしてみえんな」といっている。その中でも、M姓は少ない。近くに親戚がまとまっているので親戚同士の会合が結構あると思われるのだが、意外に少ないようである。しかし、一方が死亡して一人になっても、「それが、町へは行きとないらしい」ということで、村を離れることは少ないようである。村に対する依存度はかなり高いように思われる。

④通信手段と利用

この村の電話機は有線放送と一体となった機種が、ある時期一斉に導入された。多くの村民は、一般の電話のように「用事のあるときだけかけたり、かかってきたり」している。有線放送は、納税日や健康診断のお知らせのように行政からのお知らせなどそれなりに役に立っているとのこと。携帯電話の必要性については、「携帯電話なんか、この電話がありゃあ、携帯電話みたいなのは必要ない」といっている。パソコンについては、「パソコンは若い人がみえる家は使っていますよ」、「うちらは年寄りやで、パソコンはわからん」といっている。

「電話とかが普及することで、かえって親戚づき合いみたいなものが疎くなったというようなことはありますか」について、「そんなことはないです。ただ、今はそれぞれの家が独立しておるような感じやな。それで、助け合うというようなことはないです」といっている。また、テレビについては、「昔、テレビなんかが入ってきたときは、どっかのうちでテレビ入ると見に行ったなんていうのがありましたけど、そんなことはあったんでしょうか」。これに対して、「ここらは一斉に入れてまったんやで、結局共聴になったもんで」といい、電話と同じようにほぼ一斉に導入されている。ただし、最初の電話の導入は外部と通信することができない、村内だけのものである。

⑤環境の変化

この集落の家々をみると建て替えた新しい家が散見できる。「昔から見ると、随分家がふえたという感じがあるんでしょうか」というと、「いやあ、ふえていないです」、「新しい家はみんな若い衆のみえる家や」といっている。

この村の近くには、自動車部品開発のD工業という会社が進出してきたため、雇用がある程度確保されるようになった。そのため、この村から通勤する者も増加した。また、そこに勤めて、定年になると退職金で家建て直すことが多いそうである。(安藤明之)

Ⅲ. Kさん

①ムラの境界にある家

Kさんの家は、ムラの始まりにある。南北に流れる長良川の堤防に沿ってあるのだが、北に少し上がって西に曲がるとムラの集落がある。地理的にはムラの境界といいいい辺りにある。以前はもう少し下、遊歩道があるところにあったが、2つの台風による水害があって、1989(平成元)年に道が今の位置にできて、新しく家を建てて移ってきた。それまでは雑貨商をやっていたが辞めてしまったそうだ。立ち退きになりここに移ってくるまでは、Kさんの家しかなかったそうだ。「そこの前の家も、あの人もこの郡上川から立ち退きで出てみえたんです。それで、それまでは家から始まりでした。」この家は、郡上川の郡上村の入り

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

口にあるのだけれども、一般の人たちは、ムラの家だと思っていないようだ。

1959（昭和34）年9月26日に東海地方に上陸し、岐阜県の中央を縦断して27日、0時45分、日本海へ抜けた「伊勢湾台風」が、郡上村を流れる長良川も氾濫し村に被害を与えた⁴⁾。キヨコさんの家も流されはしなかったが鴨居まで水が来たそうである。この「伊勢湾台風」の前には、5、6軒家があったそうだ。「私が来た（Kさんが嫁いできた1970年の）ときは、隣に1軒自転車屋さんがありましたけれども、そこも何かかんかでなくなったんです。」

また、1961年9月16日に室戸岬に上陸し、近畿東海地方を襲った昭和36年第18号の「第2室戸台風」も村に大きな被害をもたらした⁵⁾。

この台風被害の復興とともに1965年頃、ムラと国道156号線を分断するように流れていた長良川に橋が架けられ、国道に出ることができるようになった。それまでは村から国道に出るには渡し船を使わなければならなかったらしい。「もう42・3年前ですか、昭和40年という。何か昔は、話に聞くと渡し船だったらしいです」。

KさんがF家に嫁いできたのは、それからしばらく経った1970年のことである。そのときF家は、ムラの人たちが買いに来る雑貨商を営んでいた。

Kさんは明^{みようがた}方村から、「D工業(株)岐阜工場⁶⁾」に勤めていたご主人と結婚した。当時ムラの同じ年代の人たちはほとんど「D工業」に勤めていたそうだ。ご主人は、自分の家の山の仕事はしていたが、稼ぐための山の仕事は全くしていなかった。その頃、山の仕事はサラリーマンの給料より山の仕事の方が稼ぎはよかったそうだ。家は雑貨商を営み、ご主人は少しあった田畑を仕事が終わった後や日曜に耕していた。

1989（平成元）年に立ち退きになり、新しく建てた家はF家が所有していた山の木を使った。このとき少しあった田畑もなくし、雑貨商もやめたので全くのサラリーマン家庭になったという。

②現在の家庭生活

Kさんの家は夫と息子夫婦とその孫2人の6人暮らしである。Kさんは、昭和14年生まれで71歳（2010年現在）で無職である。嫁いでまもなく、「私は働いていました。近くのAというところのプラスチックという会社で、今のおばあさんが丈夫かったで勤めに出ていて、私の58（1997年）のときにおばあさんが足をちょっと折って、それからもうやめて、おばあさんの介護に当りました。」近所にあったこの会社は今もう無いけれども、送り迎えをしてもらいながら、働いていたそうだ。姑は6年前に97歳で亡くなった。

夫は、1937（昭和12）年生まれで73歳である。Fさんとはいとこ同士になる。D工業で定年満期まで働き、今はその下請け会社でパート勤めをしている。息子は1968（昭和43）年生まれで42歳で、「A製作所」の岐阜工場⁷⁾に勤めている。嫁は白鳥から嫁いできた。

孫は、小学6年生と3年生の男の子2人いる。2人ともピアノと太鼓を習っている。時代

が変わって、男の子がピアノを習うことも不思議ではなくなったという。上の子は地元の中学校に進学するそうだ。中学生になると、八幡、美濃、関の塾に行く人もいるが、町にも塾があり、その塾に行く人が多いそうだ。高校は八幡の奥の方（県立郡上高校、県立郡上北高校）や、下（美濃市や関市）に行ったり、岐阜市に行ったりする人もいるそうだ。

息子と一緒に暮らすことになったのは、息子の方から、「一緒に住もう」と言ってくれたからだそうだ。仕事についても、一遍は外に出た方がいいと思っていたのだけれども、出て出なくてもどちらでもよかったので、たまたま近くのA製作所に就職が決まっただけだった。

このムラで生活していて特に不便なことは無いそうだ。冬は雪が積もるけれども、「除雪」人が入りしのいでいる。暖房は石油ストーブを使っているし、風呂は薪で炊いている。夏は田の字型のつくりなので涼しく過ごせる。食事の支度も嫁がやってくれる。買い物も夫に運転してもらって町（郡上市）まで出かける。また通信販売なども利用している。郵便局の「ふるさと小包」を、夫の妹の旦那が郵便局に勤めていることがあって、月に1回送ってもらっている。不便になったのは郵便局が民営化されたことだ。「以前は郵便配達の人に頼めたが今はできない」という。

Kさんの現在の生活するための活動は、ほとんどムラの中、あるいはその周辺で間に合っている。生活がムラとその周辺地域で完結しているともいえるだろう。

電話やパソコンなど、外とのつながりを可能にするメディアについても同様の事がいえそうだ。

Kさんのところでも電話は玄関近くに置いてあり、ムラの情報が入ってくる小口機もおいである。村ではどこの家も玄関に置いていところが多いそうだ。Kさんが嫁いできたときには、家にまだ電話は無かった。1980年頃に電話を引いたのだが、電話が来たときは、世界が広がって明るくなった感じがしたそうだ。そのときKさんは、自分の実家には電話はまだ無かったけれども、電話がついた後でも、実家は義理の姉がいたので電話はしなかった。兄弟に電話することが多かったそうだ。

携帯電話は、息子夫婦と夫が使っているが、一人ずつ持っている訳ではない。2台をうまく使い分けている。孫も当然持っていない。Kさんは出かけるときに持っていくそうだ。

パソコンは夫も息子もしない。これからは孫にやってもらうだろう、という。

こういった携帯電話やパソコンなどIT機器は、個人の道具というよりは、家族の道具として共有し、ムラの生活に合わせうまく使いこなすことを心掛けていようだ。

Kさんの現在の家庭生活は、貧しさゆえの強い連帯感ではなく、家族の強い信頼感のもとで協力し合っている姿がイメージされる。またこの家族を軸とした生活が、ムラとその周辺の地域社会で完結しているといえる。

③ムラの生活

Kさんの家も郡上神社の氏子である。役員さんが月例祭をやっているけれども、キヨコさんのような一般の人はあまり出ないそうだ。大祭も同じで役員さんたちがやっていて、一般の人は手伝うことはないということだ。氏子としてお金を払っているだけで、行事を運営したりするという意味での信仰は無いようだ。

だがウナギの信仰はあるようだ。ムラに代々住んでいる人は食べないからウナギの味を知らない。「だけど、あんなおいしいものはな。本当のことを言うと、それはここに前からずうっと住んでみえた人は、その味は知ってみえないで、わかってないわね」。

ここ郡上川のウナギは昭和の半ばまでは大量に生息し、大正13年には「うなぎの群生地」として国の天然記念物にも指定されている。昔はウナギがたくさんいた。「私は来たときは本当に出ました。うちでもエサを売ってましたから、サナギを持って行って揉むと、何にもおらんところからこうやって出てきましたよ。あれは不思議です」。ウナギについてはこんなエピソードもある。「川におひつを、おひつってわかりますかね。ご飯を入れるあれにまだご飯粒がついているもので、それをふやかしているとウナギがそれを食べに出てくるんですよ」。そのような情景の写真が資料館の『郡上村ふるさと館』にはある。

ウナギが突然少なくなったのには言い伝えがあるそうだ。「一時私が来て何年でしたかしら、ササが枯れるときが、何年か私も覚えていないが、ササの花が咲いて、その花が咲くと川の長いものが死ぬというあれがあって、やっぱりこのウナギもすぐ死にました。白くなって浮いてきて、あれで大分死んでしまったようです」。上流に工場等は無いので水の汚れが原因とは考えられない。

このウナギは、川へ下っては行かず、この川で冬を過ごす。「うちの主人がまだ若いときなんかは、夜、ウナギがとりやすいもので、よその人が入ってくるもので、その夜回りがありました」。ウナギ泥棒の対策としてムラでは、消防団が夜回りをし、ウナギを大事にしていたということだ。しかしウナギが減ったのは、台風の水害があってから、川が浅くなり深みが無くなり、川が変わってしまったからだと考えているようだ。

Kさんがこのムラで暮らすことになったのはムラの祭りと関係があった。Kさんが25歳の時、主人と見合いで結婚した。村の神輿を、自分が生まれた家の前にあった仏壇屋に、自分のいここである使用さんが修理に持ってきた。嫁がないという話が出て、近所の人があそこの家に年頃の人がおる、ということになった。「お祭りの神輿が取り持ちの縁みたいなもんだって」と言う。

昔は、式は3日間くらいかけて家で挙げた。まず来る前に座敷をもうけ、夕方来て、入り込んで夜は祝儀だった。また式の当日の夜に主人の友達とやり、その翌日には2・3人だけだけれどもやったという。

このような冠婚葬祭の行事では、ムラの人たちの協力は不可欠だったようだ。葬儀などで

は、親戚や班・組で3日間くらいお手伝いをした。また隣の家を借りて、お坊さんの休む家にした。私のところは隣が居ないので、そのための余分な部屋をつくった。

今は斎場がムラにできたのでこの必要性がなくなった。さらにもうこのようなムラの人たちの手伝いもない。葬式のスタイルが変わってしまった。ムラでは、5年前から決まりができて、食事も助六寿司を頼むようになった。

ムラに電話やIT機器が導入され、道路ができたり、郵便局が無くなったりして生活環境が変化していくとともに、ムラの人たちとのつながりは、「ウナギを食べない」などムラの決まりを守るといった面では強く、行事や儀式などでは協力を求めにくいという点ではそうでない面があるようだ。

しかしムラは、境界を変え、姿を変え、人間関係を変えつつも、生き残っている。これからどのような変化のもとでどのようなムラになっていくのか興味は尽きないムラである。(上田裕)

IV. F家IさんMさんご夫婦

① 50年にわたってムラを見つめ続けてきた家

ムラを貫く静かな川の両岸には、山に向かうなだらかな細い坂道に沿って幾つかの集落が軒を連ねる。同姓の世帯が幾軒も立ち並ぶ集落の中腹辺り、穏やかな川のせせらぎ沿いに歩を進めていくと、まわりの風景とごく自然にとけ込むような茅葺き屋根の家が見えてくる。そこがF家、IさんMさんご夫婦のお宅だ。

Fさんご夫婦がこの家を建て替えたのは1959(昭和34)年3月のこと。だがその直後の同年9月、忌まわしき伊勢湾台風がこの地方を襲った。凄まじい被害をもたらしたこの台風によって、離れの家の屋根は吹き飛び、家のすぐ傍の川に架かっていた橋は流され、山の樹々はことごとく倒壊した。だが、幸いにしてFさんの新居は大きく傷つくことはなかったという。聞けば、家の造りが近年の「ボルト差し」ではなく、昔ながらの「ほぞ差し」で出来ているため、台風の災禍にも持ちこたえることが出来たのだとのこと。それから50余年、この茅葺き屋根は、変わり続けるムラの風景をずっと見守り続けてきた。

② F家の歴史とムラの生活

何度かの台風に見舞われてから、このムラでは神の遣いと奉られるウナギの姿が川からめっきり減ってしまったという。奥様のMさんは回想する。

「あの時分(昭和24年頃)は、ウナギは今思うと本当におとぎ話みたいなもみやけど、このぐらい太いやつが、ほんで長いやつがたくさんあって、川にカイコのさなぎをたたいて流してやると、下からいっぱい上がってくる。こんな細いやつから小さいこんなイワシから、

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

だーっと」。

ご夫妻はともに1931(昭和6)年生まれ。MさんがIさんのもとに嫁いできたのは1953(昭和28)年のことだ。当然のことながら、この地で生まれ育ったIさんは、神の遣いであるウナギをいまだに一度も口にしたことはない。

Iさんはこの家では3代目にあたる。近隣のF家の中では比較的新しい方だ。親戚筋にあたる同じF姓の財閥家では、現在13, 14, 15代と3世代が同居しているそうだが、Iさんのこの母屋に住むのは現在は夫婦お二人だけだ。

この集落の歴史は古く、生涯に12万体の仏像を彫ったと伝えられる江戸時代の行脚僧円空(1632-1695年)も、この地に縁の深い人物である。現在その円空の遺志を継ぐ神主の方は代々の世襲で39代目となり、Iさんは49歳の頃からその補助的な役割を務めている。この地がお宮としている神社のしきたりは厳格であり、毎月の月例祭も必ず決まった日付で行われているようだ。神を祀り、神に仕えてきたムラの系譜を、Iさんは正統的に受け継いでいる存在と言えるだろう。

かつて、この地区の伝統的な産業といえば、林業を代表格に養蚕、炭焼き、そしてお茶作りなどであった。そもそもIさんが生まれ育ったF家は薪炭業者で、一時は50人ほどの従業員を雇用して一財産を築いた。初代のおばあさんがしっかり者で、薪炭で財をなしたのだという。加えてIさんのお父さんは歌人でもあり、短歌や詩をたしなみ、靖国神社などの歌会にも入選するほどの腕前だったとのこと。商才と風雅さ、そしてリーダーシップを併せ持ったF家の家柄が伺われる。

だが、近年は林業など一次産業の景気はすこぶる悪く、Iさんのお孫さんご夫婦も家業は継がず、二人とも公務員(教員)なのだという。Iさん自身も、自宅の林業ではなく、県から委託された仕事や神事関連の嘱託の仕事で収入を得ているというのが実情だそうだ。

そんな状況下でも、Iさんはじめ、いまだ田畑を手放さず、耕し続けている人は多い。「米は大変つくっておりますから。どえらい余るぐらい」。余った分は供出はせず、誰かにあげてしまうことが多いのだそうだ。自分がカネを稼ぐためばかりではなく、皆がムラで助け合って生きていくために労働していこうとする点にも、Iさんならではのリーダーシップが感じられる。奥さんも2反ほどの土地で野菜を耕しているが、こちらの方は野生のサルに食べられてしまうので、最近は外で買ってくることのほうが多いのだそうだ。

この近隣一帯にとって、サルは天敵である。田畑の周囲に電気柵などを張り巡らせても、賢いサル達は難なくその柵をかいくぐって畑を荒らしてしまう。捕獲しても食べられないし、人の数に比してサルの数は増える一方だと二人は嘆く。

そしてサル同様あるいはそれ以上に深刻なのが、イノシシによる被害である。既に狩猟歴50年余りというハンターでもあるIさんは、シシ狩りの取材で何度か全国紙にも取り上げられたことがあるほどの有名人でもある。現在は大学生にもシシ狩りを教えているというI

さんは、仕留めた獲物の日付入り写真を何枚も見せてくれた。これまでに捕えたシシの数は数百頭。もちろん県知事からの免許証を得た上での狩猟であるが、最近は猟銃はあまり使わず、もっぱら罠を仕掛けて捕獲、殺処分にすることが多いのだという。

「人間の数は減ってまし、おれらでも跡継ぎがあらへん。それはしょうがない、時代の流れですから。でも山は宝の持ちぐさですね」。

他所から訪れる観光客や研究者のガイド役を務めることも多いというIさんは、お宮にも樹齢700年という木があるのにと、残念そうに語った。

「一番僕が心配するのは、植林ですね。今はいいですよ、水はたぶろくある、植林してね。幾ら照っても水はあるでね、これは木のおかげですな。でもこれもはげの山やったら、水は切れてまって、こんな清泉な水は出ませんで、これは植林のおかげですから。水が豊富にあるということは山の植林のおかげですけど、ますます木がしとまってまうでね、これから。杉なんか、もう70年も置いたらこんなもんですな」。

無計画な伐採計画が環境破壊を招き、一方カネにならないからといって植林政策を安易に転換してしまうことで生まれる危機を、Iさんは危惧している。山や木に対する愛着を語る一方で、いくら切っても市場で値のつかない林業関係者のジレンマを、Iさんは切々と説明してくれた。

「とにかく市で小美林作戦で、今環境をよくするために、外部の家の近いところとか近所を切ってしまうでしょう。この間も切ってしまったね。あれ、市からどえらい援助をもらっておるんですよ。そんで、わしも随分切ってあげたけど、結局切り賃は出していただいても、市場へ出しても、持ち運び、運搬賃、手数料、それに全部取られて、自分の懐へ入るところはゼロというか、ささいな金、涙金。こんなもんに自分で費用を出したら、もとの切り賃から何もない、大赤字ですよ。まあ、木みたいなのはだめです。ひどい植林ですぞな」。

かつてはムラの収入源であった林業が、無計画な植林政策によって混乱させられ、そして時代とともに需要が減少することによって今度は伐採を命ぜられる。流れる時の狭間で翻弄されざるを得ないIさんの悩みは深いようだった。

「うちのおやじら、杉はとにかく僕にやかましかったで、おんで行っても上に行っても、とにかくおれに名前を寄せて、30年なりゃ杉は金になるで、杉を植えよ、30年なりゃ金になるでって。金だけやってんな、植林と養蚕とお茶は。本当にそんなようなもんやった。あれは、今植林してまって、これの行く末どうなるんか知らん」。

かつては、育てて出荷するまでに倍の年月を要するヒノキなどよりも、杉のような樹木の方がすぐにカネにすることが出来た。戦後全国で実施された植林政策は、このムラにおいても例外ではない。

「間伐も国の方の予算がないで、そうできんです。太いもんそう切ったってしょうがない。切ってこなごなにしたら、どえらい水が来ると集中豪雨で、その来て流れていくと、どえら

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

い災害をくってまうで。そういうことも考えないかね。裏山なんか切って転がしておいても、恐らく向かい近所でもそうですけど、今もとを倒して除間伐をそのままじゃないですな。やっぱり何メートルに切ってつがんで、それを木のところに積んでおくもんですから、集中豪雨が来るとどこへどういうやつが来るかわからん。落ちてくる。なので集中豪雨になってまう。そこへ流れていってから、家も何かも押していってまう。それで今被害が随分起こっておるんです。これは日本全国的に植わっておるでね」。

長年、このムラで定点観測をしながら、同時に数多くの山々を歩いてきたからこそ言える日本全国の山々に通ずる切実な問題を、Iさんは丁寧に語ってくれた。

③ Mさんとムラ

奥さんのMさんは、近隣のM市からこのムラに嫁いできた。実家は農家で、養蚕で生計を立てていた。ウナギも食すことが出来ぬ土地柄に、当初は「おぞい（こわい）ところへ来たもんやわ」と感じたという。嫁いできた当時は戦争直後で、行商のおばあさんがよく品物を売りにきたそう。さすがに最近では行商は来なくなったが、Mさんも含め、いまだこの近所では自動車免許などもっていない主婦が多く、皆で乗り合いをして近隣の街に買い出しに行くのだそう。

「私んた、まず終戦のときになった者はほとんど運転はせんけど、子供はみんなするもんで頼めるわけ。何ていうんか知らんけど、やっぱり世の中の移り変わりで、本当に難儀なこともあるわ。やっぱり自動車なんか乗らんもんで。子供も、下の次の子たちは自動車乗るし、みんな自動車で働きに出てまうでね。ちょっとしたところやけど」

いまだにムラの外に出る為の交通の便は非常に悪い。近頃はインターネットショッピングなど通信販売もあるが、あまり利用はしていない。最近も東京の美術商だという者からキャッチセールスマガいの手法で写真を売りつけられそうになったこともあるという。幸い警察に相談して事なきを得たが、詐欺まがいの手法で売上を騙しとろうという悪意は、この静かなムラも標的にしているようだ。

④ ムラとメディア生活

IさんMさん夫婦も、パソコンや携帯電話は使用しないが、息子や孫達はそういった最新機器は当然のように全て利用している。年老いたご夫婦にとって、メインとなる外部への通信手段というやはりムラ中に巡らされた有線電話となるようだ。決まった番号を回せば、この一帯に限ってはいまだ無料で通話が可能である。地上波デジタルテレビも早々に契約したが、それほど気にかけているわけではない。

人里離れたこのムラとはいえ、携帯電話もインターネットも地上波テレビも、ムラと外部を繋ぐインフラストラクチャ＝メディアは既に一通り揃っている。高齢ゆえに最新のメデイ

ア機器を使いこなすことが難しいという事情はあるにせよ、それらを使わなくてもIさんやMさんの生活が特段に不便を被っているという印象は受けない。それは、このご夫婦以外のご家庭を訪問した時にも感じたことである。何故か。

ムラの多くの家庭生活の中心に共通して在るコミュニケーションメディアは、いまだ各家庭で毎日利用されている有線電話である。ムラの人々は、このメディアから流れる情報に日々耳を傾け、明日の天気や、ムラの催しや、近隣の知人たちの健康具合を知る。逆に言えば、ダイヤル一つで自由にやりとりをすることが出来るこの有線電話が画定するコミュニケーション区域が、ムラのコミュニケーションの「場」となる。

他の地域から隔絶され、閉じているというわけでは決してない。このムラのメディア機器の普及状況を見れば、むしろ積極的に新たなメディア変容を受け入れているといってもいい。しかし、時代の潮流にいたずらに翻弄されず、必要なものは取り入れながら自分たちの生活を守ってこうとするムラの姿勢の象徴として、この有線電話は存在しているように見えてならなかった。

玄関先で行われていた取材の最中、ムラの役場からのお知らせを流すスピーカーからの声が、家の中そして屋外からも同時に鳴り響いた。この放送はこの集落一帯に全て共通して流されている。(山崎隆広)

V. F家Hさん

①少子化と郡上村

郡上市でも、65歳以上の老年人口の増加のいっぽうで、0～14歳の年少人口、15～64歳までの生産年齢人口の減少は顕著である。特に、20～24歳までが特に少なく、子どもも減少し、今後急速に高齢化が進行することが危惧されている⁸⁾。Hさんの学生時代には、周辺集落あわせ「150名の同級生がいたが、現在では20名台」であることから、郡上村周辺地域でも少子化が進行しているようである。しかし、郡上村では、極端な少子高齢社会ではないという。その理由の一つに、親子で一緒に住んでいる家が多く存在しているからである。Hさん宅のように3世代、4世代一緒におなじ釜の飯を食べている世帯は少なくなってきたものの、それでも2世代いっしょの世帯は多い。その証拠に一軒の間取りは部屋が多く、玄関に土間がある家も多い。また1965(昭和40)年頃、それまで郡上村では藁葺き屋根の家が主であったが、ほとんどの家がそれ以降改築し、現在まで築40年以上たっている家も珍しくない。さらに、庭が広い家などは、隣に息子夫婦の家を建てることができ、住まいは別であっても、食事は一緒にとる家庭もまだまだ多いようだ。

郡上村では、職場や学生時代の同級生などと結婚するケースが多く、遠方から結婚相手を見つける傾向は現在でも希である。これは、2009年に実施した「第5次郡上調査」の聞き

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

取り調査結果からも、郡上村周辺から嫁いでいるケースが多かったことからわかる。一方、現在では郡上村では、30代から50代の特に男性独身者が、約1割から2割を占めている状況にある。このような状況下で、行政として何か対策はとっていないのか。

結婚促進対策として郡上村周辺集落では、中国や台湾、フィリピンといった国々から紹介者を通して国際結婚をしているカップルは数件存在するという。現在では郡上村では国際結婚といったケースはまだないが、郡上村でも今後国際結婚が増えていく可能性はあるようだ。

国際化は、観光業にも影響を与えている。国際化の重要なインフラは、中部国際空港である。「中部国際が。あれで非常に郡上というのは便利なんですね。空港をおりて1時間ちょっとでしょう。こんなところはあんまりないですよ。だからもっともっと誘客をとということで、今年に620万ですか、観光客が訪れていますけど、その中の特に中国、台湾、韓国の方が多くなっていますね」。岐阜県には、世界遺産白川郷合掌集落をはじめとする観光スポットや郡上踊りや高山祭りなど、日本伝統を継承している文化遺産も数多く存在し、国際空港から約1時間でアクセスできる立地条件あわせ、外国人観光客の増加も見込まれる。

②むらびと同士の交流

郡上村では、地域の結束力が強く結婚率が高いのも、少子高齢化に歯止めをかけている理由だとHさんは答える。これは、郡上村商工会青年部が発行している「郡上村電話帳」の記載で確認しても、郡上村では夫婦二人だけの記載は少なく、一世帯あたりの記載人数は、ほとんどが4人以上の世帯で記載されている。これは、前年の悉皆調査でも同じ傾向であった。

では、具体的にどのような取り組みが行われているのであろうか。15年ほど前までは、野球やソフトボールといったスポーツでの交流を通して、毎晩のように汗を流していた。最近では、ゲートボールとかグランドゴルフといった、シニアクラブが活発に活動を行っているいっぽうで、婦人会が2010（平成22）年3月に解散した。

いっぽう、毎月の月例祭や4月に行われる大祭、自治会単位での集会在、年に4、5回開かれたり、夏祭りや盆踊りなど、昔ながらの祭礼行事はむらびとの購入行事として、現在でも残っている。また、若手の会である「一里会」があり、2009年実施された、「第7回日本山村会議」での中心役を担った。

この「一里会」は、長良川から県道の奥になる星宮神社までの距離、約4キロにちなんでつけられた会の名前である。この会の前は「十五日会」と呼んでいたが、Hさんらの世代を中心に、平成元年、当時の20代から40代がメンバーとなって、この「一里会」と会名を変更した。

「昔からみたらうっと減っていますけど、まず祭礼が毎月ありますよね。そうして月の自治会単位の集会在年に4、5回、それからこの間、盆の13日の晩に公民館活動があります

ね、それでいろんな行事をやるんですよ。それで夏祭りをやって、皆さん集まってきてパーティーをやったり、一杯飲んで、盆踊りをして交流をしたり。それであとはいろんな、ここはまだ残っているんですけど、昔ながらの祭礼行事、例えば秋葉様の祭りとか、いろんな八王子まつりとか、そういう祭りのときに寄る機会かなあと考えています。もう一つは、最近薄らいでいるのは、この間もちらっと話したけど、一里会という会があって、それは若手の会なんだけど、これがもともと地域おこしの会やったんですけど、だんだん皆さん忙しいんかわかりませんが、どうもその辺も低下してきているんで、だんだん村そのものの元気が僕はなくなってきていると思うんですよ。こここのところで、この間もちらっと話しましたけど、今言われるのは、やっぱりみんなが少しでも暇があれば寄る機会をつくって、意見交換をしながらどうしていこうかというものを持っていかないと、だんだん寂れるのと水臭くなると思っていますから、もう少し元気を出していきたいなと」。

そんな思いがある中で、2009年9月19日から21日までの3日間、郡上村を会場とした「第7回日本山村会議」が開かれた。これは、2年に1回全国各地を会場とし、山村の体験を知り、山村のありかたを考えことで開催されている会議である。そこで、郡上村が第7回会議の会場となったのだが、この3日間に、全国から約100名近くの参加があり、地元住民も約150名加わり盛大に開催された。山の仕事や村での生活といった郡上村の生活体験のほか、修験道、行場巡りとといった、郡上神社や円空にちなんだ村独自のプログラムなどが用意され、それぞれむらびとが中心となり、参加者たちに村の魅力を伝授した⁹⁾。

このような催しが行われ、月に一度行われる星宮神社の月例祭を中心に、むらびと同士の交流が現在でも続いているが、15年ほど前までは、野球やソフトボールでのスポーツ交流も盛んで、ナイター設備のグラウンドも3つ造られ、毎晩練習や村同士の対抗試合なども頻繁に行われていたという。

しかし、婦人会が解散されるなど、現在では地域交流も減少傾向である。これは、女性の社会進出により、若い世代が仕事で村外に働きに出て、生活スタイルの意識変化が一因であり、その変化は冠婚葬祭でも、この2、3年で業者に依頼して執り行われるケースが増えてきているという。

「冠婚葬祭の葬の部分ですね。これが前は亡くなるとみんなが寄って、料理をつくったりやったじゃないですか。それがここ近年になってきて式場になっちゃうんですね、ほとんど式場。そうすると寄るだけで何もする必要がないですよ。それが大きく変わることになりますよね。(中略)ほとんど8割、9割方式場になっちゃいましたね、ここ2、3年で」。

日頃の生活におけるむらびと同士の交流の場が、ひとつひとつ薄らいでいく中で、人びとの他者とのつながりも希薄になっていく、そんな社会がここ郡上村でも現実味を帯びだしてきている。

③雇用

長良川と並行に走る国道156号線には、多くの工場が点在し、郡上村周辺には、大企業の工場や病院が多く隣接している。たとえば、ボルトナットや樹脂製品等、自動車用ファスナーの製造、販売を手がけるA製作所や、自動車や船舶、建設用のエンジンや部品用のすべての軸受を生産している、日本唯一の会社であるD工業株式会社など、大企業の工場が多くあり、郡上村出身者を従業員として受け入れてきた。

D工業株式会社は、1939（昭和14）年11月に設立された名古屋に本社をおく、東証第1部の会社である。林業が主な産業であった郡上村にとって、これらの工場は林業にかわる雇用の場でもある。山の仕事が衰退し、仕事がなくなる時機になると、職を求め多くの人がD工業へ就職した。

「逆に林業がだめになるころというのは、最近になって木材加工が低いですけど、（中略）おやじが炭焼きをやめたころ、あの辺から十何年というのが山の仕事がなくなる最中だったんですね。そういう人たちがみんなD工業という企業へ移ったんですよ。D工業というのは名古屋圏並みの給与体系なんですよ。だからやめても退職金は何千万と入るものですから、皆さん新しい家をばんばん建てていきますけど、割と今林業が停滞して切りかえせないかんといいくらいであったのが、昭和30年、40年、50年の前半まででしょう。そこでもう変わっていますから」。

「今は高校卒業したらD工業へ勤めれば、そうすれば生活は安定するじゃないですか。安定すれば親子で住むという形で多分残っている。それであとは食うだけのものの米が、大体これは三段腹百姓というんですけど、平均3段4段ですけど、食うだけはあるというところで、環境的には住みやすいというのが、そんなことが原因かなとは思っています」。

郡上村には山がもたらす豊富な水資源があり、田畑で家族だけ食べていける作物を栽培すれば、とりあえず食べることに困らない。また、親子三代で同居する家庭もまだまだ多く存在する。そして、以前は林業であり、現在はサラリーとして安定した収入を得られる企業に職を得れば、衣食住を特に心配することはない。冬は厳しい環境ではあるものの、郡上村の人々にとって生きていく基本三原則が確保されており、比較的裕福な環境にある家庭が多いようにみうけられる。税収の面でも郡上村は、比較的裕福であったようだ。

「郡上村というのは企業が郡上で一番多いものですから、割と税収はあったんです。反面、この村だけとらえちゃいかんですけど、郡上村のころの方が裕福だったんですよ。（中略）合併してこれがよくなったよと言えるものが、逆にマイナスが多くてプラスが少ないですね。それともう一つには、合併すると中心市街地がどうしても栄えていくんですよ。郡上村は端じゃないですか、美濃市に近いけど。それで北部地区が非常に低下していますから、これをみんなで何とかしようと今やっているんです。」

合併後郡上市となった現在、村ではなく市としての今後の運営が、村のリーダーとして試

されている。

④地域課題

郡上村周辺には、市民病院や診療所など3、4カ所あり、医療関係は充実している。その反面、行政の負担が大きく、近年効率化を求める必要があるようだ。特に病院から出るごみの処分費用の負担が大きく、見直しが必要であり、また病院同士の連携なども課題である。また、学校の老朽化で修繕工事や立て替えなど施設設備費などの負担も多く、少子化による統廃合の必要もあるという。

少子高齢化、国際化、女性の社会進出など、郡上村でも社会変化の影響が徐々にではあるが、人びとの生活にも影響を及ぼしはじめている。そのような状況でも、家族の絆を大切にし、むらびと同士のコソボ化現象を防ぐためにも、これまでの伝統行事を守り、地域交流を図り、お互い困ったときには一致団結し助けあう、そんなむらびとの思いが村のリーダーとしてHさんのインタビューを通して感じられた。

この郡上村で長年調査を実施することができたのも、また、我々のような部外者を快く受け入れ、長時間インタビューに答えてくれたのも、郡上村の人びとに人とのつながりを大切にする心の温かさがあるからではないだろうか。そんなつながりを大切にするフォルドをいつまでも守り続けてほしい。(川又実)



郡上村の山村風景 (2010年8月撮影)

第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史

注

- 1) 調査期間は2010年8月23日～26日に実施し、今回の調査を「第6次郡上村調査」とした。
- 2) 今回の調査では、前回の「第5次郡上調査」の結果から、調査対象者を抽出し、5家族の協力を得ることができた。今回の調査では、むらびとの個人史を主な聞き取りとしたため、父子や夫婦参加での団欒形式で行われた。また、F家のH氏にはヒアリングを2回行ったため、計6回のインタビューとなる。なお、調査対象者、地域名などを全て匿名、コード名にしたのは、これまでの調査同様深層的な調査を実施したことにより、むらびとのプライバシー保護のためである。
- 3) 「カッコ」内は、インタビュー対象者の声。
- 4) 「伊勢湾台風」では、岐阜県下で、台風の中心が通過する約3時間は暴風とともに、時間雨量40～70ミリの激しい雨が降り続いた。県の被害は、死者104名、家屋の全、半壊、破壊は23万戸、被害の総額は500億円にのぼったという。
全国の被害合計は死者4,697人、行方不明者401人、負傷者38,921人だった。
(岐阜県 HP : <http://www.pref.gifu.lg.jp/bosai-bohan/bosai/bosai-oyakudachi-joho/saigai-siryo/isewan.html>)
- 5) 「第2室戸台風」では、県下の被害は死者7人、負傷者110人、全半壊家屋321戸、浸水家屋7039戸、道路損壊248ヶ所、堤防欠壊49ヶ所、橋梁流失72基、被害総額4億6千4百万円、になったという。
(関市災害年表 : <http://www3.city.seki.gifu.jp/bousai/saigai/default.asp>)
- 6) 昭和20年7月、「D工業メタル」中川工場を郡上村に移転。
- 7) 1974年「A製作所」の岐阜工場が稼働。
(A製作所 HP : <http://www.asj-fasteners.co.jp/company/page3.html>)
- 8) 岐阜県総合企画部統計課「統計からみた郡上市の現状」(平成22年8月更新)参照。
- 9) 日本山村会議美濃郡上実行委員会『第7回日本山村会議美濃郡上～山と川に生きる暮らし～報告書』参照。